

文化の積層を維持する施設の再生

地域の拠点となる 無人駅

筆者はCATVの「旅チャンネル」の番組「秘境駅の旅」を愛好している。秘境駅と無人駅は同一ではないが、現在、日本には駅数全体のほぼ半分に相当する四五六四の無人駅があり、多数は秘境駅である。一日に数本しか列車が停車しない無人駅も数多く存在するが、人口の都市集中、道路整備の進展、自家用車の普及などの結果である。その現場を番組で視聴すると、明治時代以来、日本が津々浦々に発展していった時代を想起させる。

しかし、すべてが消滅の方向にあるわけではなく、新規の付加価値を追加して存続している無人駅も数多く存在する。JR釧網本線の斜里と網走の中間にある止別の駅舎には

「ラーメンきつきえきばしや」が開店しており、鉄道旅客よりも自転車旅行者に人気がある。盛岡と宮古を接続するJR山田線の上米内駅は一日に数本しか列車が停車しない無人駅であるが、駅舎内部は漆工房と喫茶店に改装され、地元の人々の交流場所にもなっている。

域外の人々を魅了する 廃校

人口の減少によって同様に急増しているのが廃校である。小学校、中学校、高等学校は一九五五年には全国に約四万五〇〇〇校が存在していたが、二〇二〇年には約三万五〇〇〇校になり、六五年間で一万校が消滅した。児童の減少と都会への人口流出が主要な原因である。政府による明治五年の「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん」の方針で

営々と津々浦々まで増加させてきた学校が減少に方向転換したのである。校舎が残存しているのは約七四〇〇校であり、そのうち七五%は利用されている。北海道小清水町にあった北陽小学校は地元の農水産品を菓子に加工する工場として再生され、見学可能であるし、立派な時計台のある建物は観光施設にもなっている。高知県室戸市にあった鉄筋コンクリート三階建ての椎名小学校は二〇〇六年に廃校になったが、屋外プールだけではなく内部にも水槽を設置した水族館に再生され、人気施設になっている。

新規の役割に変貌する 空家

国内の空家の戸数は一九六三年には五二万戸であったが、年々増加して二〇一八年には八四六万戸にまで増加した。比率は住宅全体の一四%になり、半世紀強で一六倍に増加したことになるが、同一の期間に住宅の戸数は三倍の増加でしかないから異常な事態である。空家が放置されると犯罪への利用、放火の危険、倒壊の危機、ゴミの投棄などの場所になり、個人の問題だけでなく、地域社会の問題に拡大していく。そこで空家を有効利用する事例が次々と登場してきた。茨城県(旧)里美村では、歴史のある民家を会員制の宿泊施設に利用している。三重県伊勢市では、NPO法人が由緒ある商家を改修して喫茶店や美容院を開店する斡旋(あつせん)をしている。これら過疎地域だけではなく、都心にも有効利用の事例が登場しており、東京の都心にある企業の社宅として利用されていた集合住宅をベンチャービジネス対象のオフィスにした成功事例もある。

る家庭は例外で銭湯を利用するのが普通であり、地方から東京の大学へ進学した時代も銭湯を利用していた。その銭湯は一九六八年が頂点で全国に一万八〇〇〇軒が存在していたが、以後は減少一途で現在では十分の一しか存在しない。説明するまでもないが家庭に浴室が普及した上、入浴料金は都道府県が設定する上限があるので、自由に料金が設定できない影響もある。

香川県多度津町でも大正末期創業の「清水温泉」が平成初期に廃業したが、地域で民家再生活動をした人々が風情のある建物の外観を維持して「藝術喫茶 清水温泉」として復活させた。廃業した銭湯を魅力ある銭湯として復活させた事例もある。京都に戦前からある「鴨川湯」が二〇二二年に休業したが、これまでいくつかの銭湯を復活させてきた実績のある京都の会社が、歴史ある風情を維持したまま復活させた。

現在、われわれが生活している環境は、何層もの物理環境と何代もの精神環境の積層の上部に存在して

東京大学名誉教授
つきお よしお
月尾嘉男



昭和一七(一九四二)年生まれ。東京大学工学部卒業。工学博士。コンピュータ・グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策等を研究する。とともに、全国各地で私塾を主宰し、地域の有志と共に環境保護や地域計画に取り組む。

地域の拠点として再生 銭湯も

筆者の子供時代は自宅に風呂があ

好評発売中

「AIに使われる人 AIを使いこなす人」
お求めはニューモラルブックストアにて

